

ニタリは、ネズミザメ目オナガザメ科に属する外洋性のサメです。マオナガ、ハチワレと共に世界に三種が知られていますが、グラバー図譜に描かれたのはこの一種だけ。ニタリとは「似たり」の意で、マオナガにしばしば間違えられるので、その名が付けられました。ニタリの最大全長は三・六メートル。長崎駅付近にあった魚市場からグラバー邸まで、そんなに大きなサメをどうやって運んだのでしょうか。

腹面図に描かれた一対の腹びれをご覧ください。腹びれの内側にある二本の小さな交尾器は、まだ幼い雄のサメだったことを物語っています。当時の記録では、本図のサメの全長は三メートル。ですが、実際には遠く及ばないサイズのサメだったでしょう。

## 長い尾で狩りをする

オナガザメ類の英名をthresher sharkといいますが、脱穀機(thresher)を意味するユニークな名は、捕食行動に関連します。ニタリは捕食の際、長い尾を振りかざして魚やイカを追い込み、たいてい弱らせてから食べるのです。長い尾びれと体の境目にある切れ込みのおかげで、ニタリは尾を上下に振ることができず。たぐさんのサメが集まり、各々の尾で海面をバシバシやたたき魚を追い詰めている様子が、稲を脱穀する場面に重なったのです。

ができて幸せだなと思います。それにしても、この地球上にはなんと多様な生物が生き延びていることか。私たち人間も同じ自然の中で生かされていることに感謝せずにはいられません。

## 伝統のオナガザメ漁

ねずみ色の体にかわいらしい目。高知県ではオナガザメ類をネズミと呼び、夏から秋にかけて黒潮に乗って回遊してくるところを狙ったはえ縄漁があります。高知には、サメを鉄のように硬く干した「鉄干し」を食べる文化があります。アオザメの次に美味といわれるネズミの身は、サメの中でも肉に近い食感です。ちなみに高知や台湾では、オナガザメの中で最もおいしい部位は意外にも尾だといえます。硬めの豚足とでもいましょうか、うろこを取った厚めの皮の部分は火を通すと食感が良いのです。

もう二十年ほど前、数年かけて日本全国のサメの漁獲と流通を調査したことがあります。当時の拠点だった京都を出て、四国西岸の主な漁港を訪ね歩く旅に出た時のこと。内海の色濃い愛媛の各港での調査を終えてたどり着いた高知の土佐清水は、黒潮流域の影響を感じさせる南国らしい港でした。そこで聞いたオナガザメ漁の話は印象深く、青く澄んだ海の中を悠然と向かってくるニタリの姿が目には浮かぶように

う。尾に釣り針が掛かるのも納得です。高知県沖にいけすを持つ大阪の海遊館では、飼育中のニタリが尾を上向きに振り上げて強烈な力で餌をたたく様子を観察し、命中率は五割以上だったと報告しています。この命中率は果たして高いのか？ 低いのか？

## 胎仔は卵を食べて育つ

ニタリを含めたオナガザメ類の繁殖様式は一風変わっています。左右にある子宮内で育つのは各一匹の胎仔。つまり、一度の出産で生まれるのは、たった二匹です。受精卵の発生から全長十二センチに達し、卵黄をほぼ吸収し尽くす頃、薄い卵殻膜を破って子宮内に出てくると、その後は母親の卵巣から送られてくる未受精卵を食べて育ちます。受精から一〜二年後には、胎仔の全長は一・五メートルを超えているのですから驚きです。これが「卵食」と呼ばれる繁殖様式です。その様子を初めてこの目で見た時、卵粒が思いのほか小さいので、どうやってあの巨大な胎仔がで上がるのかと不思議でなりませんでした。後日、別の個体を観察する機会があり、たぐさんの小卵が透明な膜の中にぎっしり「バック詰め」された状態で輸卵管に入っていたのを見て合点がきました。バック詰めは、仕組みはまだよく分かりませんが、神秘的な生命の営みをまた一つ知ること

心躍らせたものです。ところが先日、もはやその漁は行われていないと聞きました。日本各地で魚が減り、少ない漁獲物を横取りするサメを嫌い、食べられないままに取られず、駆除する地域が増えています。サメは、食物連鎖を通じて生態系を調節する捕食者としての役割を担っています。古くから各地に神様と関連した伝説が残されているのも、むやみに取ってはならないという戒めではないかと思うのです。

数年前に、高知県庁で働く卒業生からサメによる漁業被害と対策について相談がありました。私は二十年來オナーンキャンパスで高校生に試食させているサメフライを伝授し、実際に高知の小学校給食で提供されることになったのはうれい第一歩でした。先日、土佐清水の港で大きなサメを解剖していたら、興味津々で見に来ていた子どもたちから、給食のサメフライがおいしくしてお代わりしたと聞きました。次に提供されるのは目の前にいるニタリたち。今年も楽しんでもらえるかな、と顔が緩みましたが、定着するまでが挑戦。身が引き締まる思いでした。



解説 山口敦子  
長崎大学水産・環境科学総合研究科教授

YAMAGUCHI Atsuko  
東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。2000年から長崎大学。専門はエイやサメなど魚類学と水産資源学の研究。主な著書に「干潟の海に生きる魚たちー有明海の豊かさの危機」(東海大学出版)など。

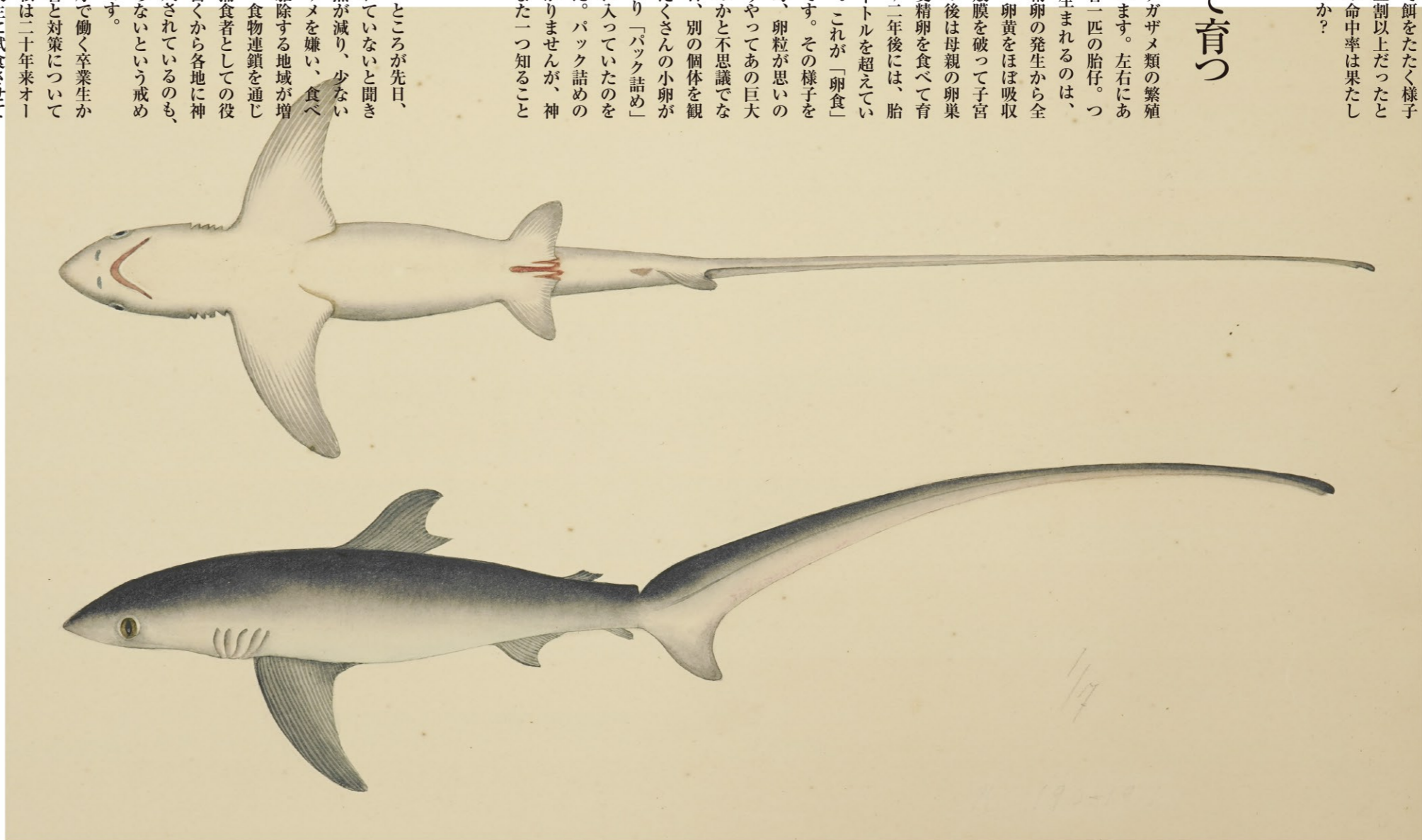
# Glover Atlas ニタリ

*Alopias pelagicus*  
画家 長谷川雪香

## グラバー図譜 日本西部及び南部魚類図譜

Fishes of Southern  
& Western Japan

グラバー図譜は一切の引用  
および転載を禁止しております。



長崎大学附属図書館のホームページでもご覧いただけます。

<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/>

「グラバー図譜」は、長崎の実業家であった倉場富三郎氏が編集したコレクションです。日本四大魚譜の一つといわれています。